

無飽三賦圖

會

卷之一

天文
天文

特
入遠
100



門へ遠13
番 1317
1-8

曉鐘成編

並書

霖飽三昧圖會

正月新鑄

柏平

三賊國會序



柏平

浪花曉鐘成子一日偶余が寓居を遊らひ
それ著述不乃三賊國會故推りきん
本つそ序を余所乞ふ巻成初らひてこれ
を見よん顧兼豫が三女圖會及寺島氏
の和漢三女圖會等乃意尔働つて滑稽
落れ妙哉畫也利其書はト絶ハ其臺



舞曲陰陽良妓魂膽義を論じ上ハ有頂
天文天象より中ハ社土社國西南乃妓客氣
國の奇人下ハ後園の草木名類家畜禽獸
所饌の穀類菽豆酒菓塩醬乃製菓に至るまで
詳悉さいしつ子こあれを辨べんず余よ卷まきをまて歎なげ曰いは嗚呼
奇哉妙哉此書蝸牛角上の擊う劔けん子こ何なにらん益えき鐘かね
成子親なりの實地じつちを踏ふんでまるところをしのと

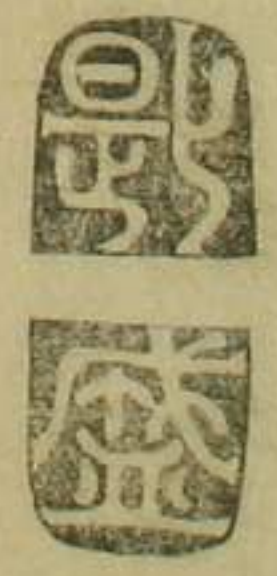
世の腐儒頭巾深衣門戸を張たい大だい小せうして徒で勞らうを
聚あつめて隱いん几ぎ正せい坐ざしてはらふ空くう理りを後く名な教きやうり
益えきなきことの比ひ不ふあらず又また郷きやう愿げん老らう爺やの放はう逸いつ少せう
年ねんを教きやう務むまる不異いなりそのよところ人ひとの骨こつ髓ずい中
徹てつく躬こつ自じ性せい日じつ此こ不ふ善ぜんを悔くわいで遂つひ不ふ謹きん愆けん郎らうと成
然しからばまるハち鐘かね成なり子こ此こ行ぎやう子こ於おるや六ろく世せい教きやう子
益えき何なにらん効きやく善ぜん乃すなはち一端いちたんといふべく見み者ものをしめハ

解頤流涎笑而不已笑已これを熟閱セバ必ズこれを
奉ルて金科玉條トせんト志スりシ

文政四歲次重光荒落無躬日

東都自多樂齊

真銘納言七盛撰

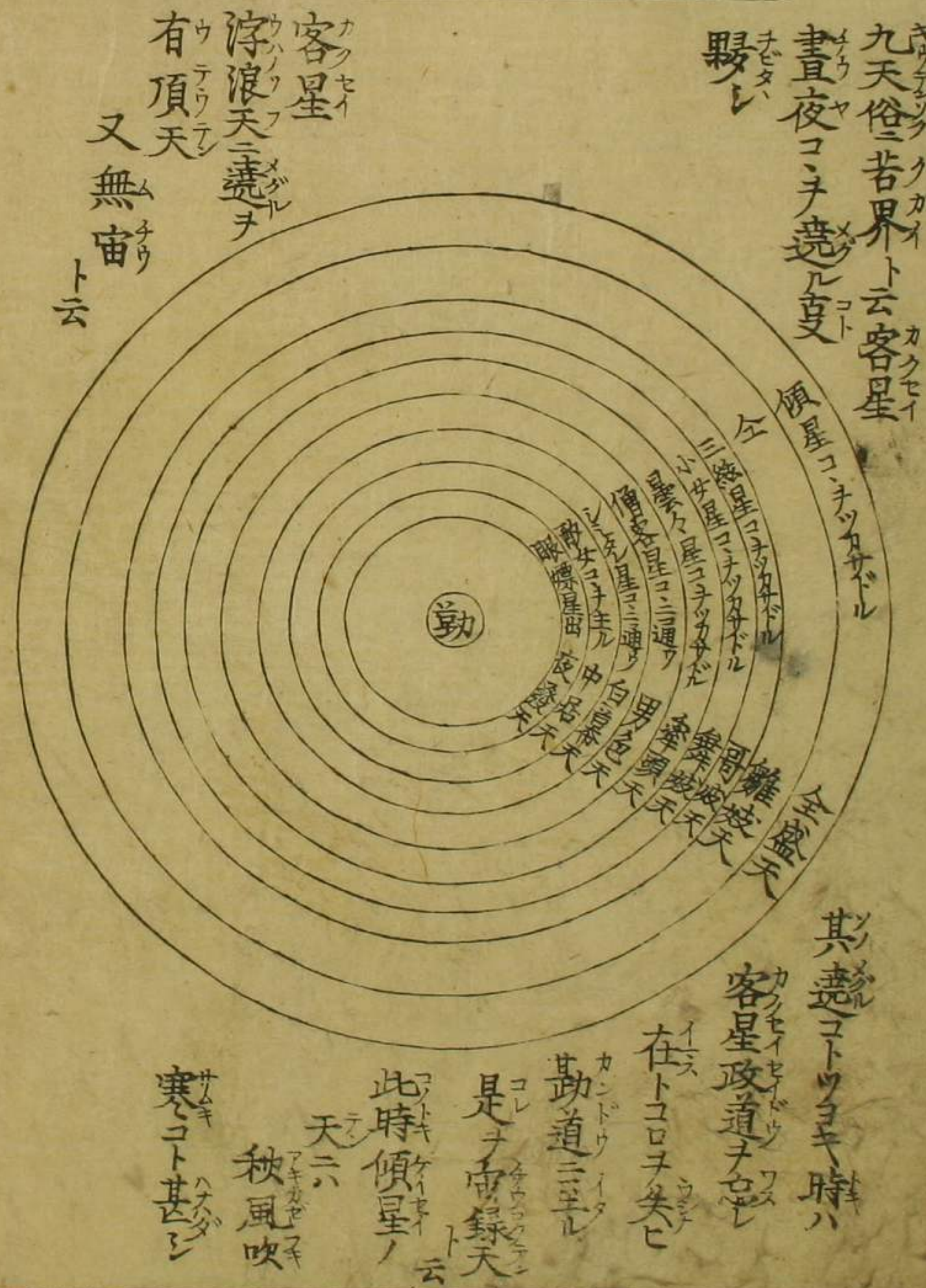


ア一四二

凡例

- 一 此書ハ遊客花街ニ戯レテ散賤ヲナスコトノ一ニテ
- 天地人ノ三才ニ附會タル洒落ナリ
- 一 浮氣客ノ意得トモナラバ是禧ナリナラヌ取ガ本
- 々ノ古ニシテ左而已毒ニモ藥ニモナラヌ書ナリ
- 一 無飽三賤圖會トハ遊客晝夜散賤ナストイヘ
- 飽更無ガ故ニ斯題ス
- 一 散賤ノ文字ヲ三賤ト書ルハ早春發兌ノ冊ニ賤コ
- 散ストハ吉左右宜カラズト書肆ガ需ニ應ジ散ヲ

九天之圖



九天俗若界ト云客星

晝夜コナ遊ル夏

客星
浮浪天ニ遊ル
有頂天
又無宙
ト云

其遊コトウキ時ハ

客星政道ヲ名レ

在トコロヲ失ヒ

動道ニ至ル

是ヲ南録天

此時傾星ノ

天ニ

秋風吹

寒コト甚シ

アノ

○全盛天ハ若界中ノ最上ホ一七至ツク高ク其色白光有テ

鳥卵ノ者抜のど一故ハ氣羨と号ク則傾星ノ天ナリ

○離妓天俗新造天と云全盛天不效ク動星斯星左右星との

差圖を受る

○哥妓天陽中の陽ホ一七晝夜鳴動くと騁俗登血

天知通天と云此空の色赤一七醉るが如一東破が詩といへる

天も花不醉コナ此天の夏あるべ一又色衰する時泥の

ど一とも云

○舞妓天ハ天人の界ホ一七晝夜舞樂を奏夫一七舞あそ

有り時々鐵漿付星袖誥星出る夏あり其象色赤く強
飯の如く一度くいつる時へ客道小障りて昂氣これが為ふ
狂ふが故ふ不順ありと云

○牽頭天是騷動天有頂天の真中ふして曇鈍星出く
陽氣の色を發し震動すると騷り其象太鼓のどり
物真似星散形星極道の方へあり夏あり

○男色天ハ陽ホして陰あり俗小穴道と云其色帽子の紫ふ
して僧客が緋衣の赤を奪ふ

○白幕天其色白めきたる内小黒さあり黒めける内小白さ有

其黒白まらうのい

○中居天一晝夜とも小酒月の遠小随ひ閨室を執あつるなり
其色春ハ紅藍の最舞の如く夏小至つて此象小夏は宙小有
て陰陽兩段の氣を兼る故小宙居天と云

○夜發天ハ苦界中の下ふして晝見ゆるとなく黄昏あり其
色を發し地小近き夏僅と遊一重三十穴余を過びして天
此間惣々朦朧たる闇雲あり眼孛星此取を主とる

○日ハ太陽の精ふして人の首の象ふして照る夏鏡の如く
日中ふ鳥あり陽氣の主なる故陽鳥と云又可愛鳥鳩鳥と云

陽鳥
金鳥



日

故小紅をりつと粧ひ立る若色を失ふ則其国の表徴あらべし
 又日中鳥見主不明乱国と是則日中の鳥を見者心を棄れ
 国家の傾くをも不知が故あり

日毎子翼の毛を磨き
 蘭奢の香白を磨瑠
 珊瑚珠金銀を以てさ
 する故小金鳥の名有
 三才圖會云日赤無
 光失色国不昌と

月
月



月

弦を張がど一故小弦月の名あり此中上弦下弦のより本
 上弦に至る光つる下弦の光あり一
 下弦に正六の両月あ
 當つる大色をうなる是客星の弦をたると云月の中

月ハ正六の両月を紋
 日月とあづく其余紋
 月毎月あんども此兩
 月小過ぞ此月傾星
 客星の迫る客星氣
 を張更恰もあとの

桂の木ありとて説有これの正六の両月小化盛あるが故あり
 正月小花爛熳とるの三月二日小客星色を變じ六月小花燃く
 たるの七月十四日客道小迫る兩節とも小陰をりゆき星氣を
 ふさぐ故月の齋とふ然れども翌朝小至つて陰氣の雲忽
 暗く客星耀をこまつ古又平日ふかりげ曠野小出るとか如
 傾星和名災星陽中の火を主とる故小一回光を放つ時金を
 主とる客星をこつて其象の真を見又稀也或説小云く
 卯子の角あるが如くとも又辛鮭の睛のどくとも生貝の真
 珠のどくとも其真の象をらづとく圓見ゆれども圓うづべ

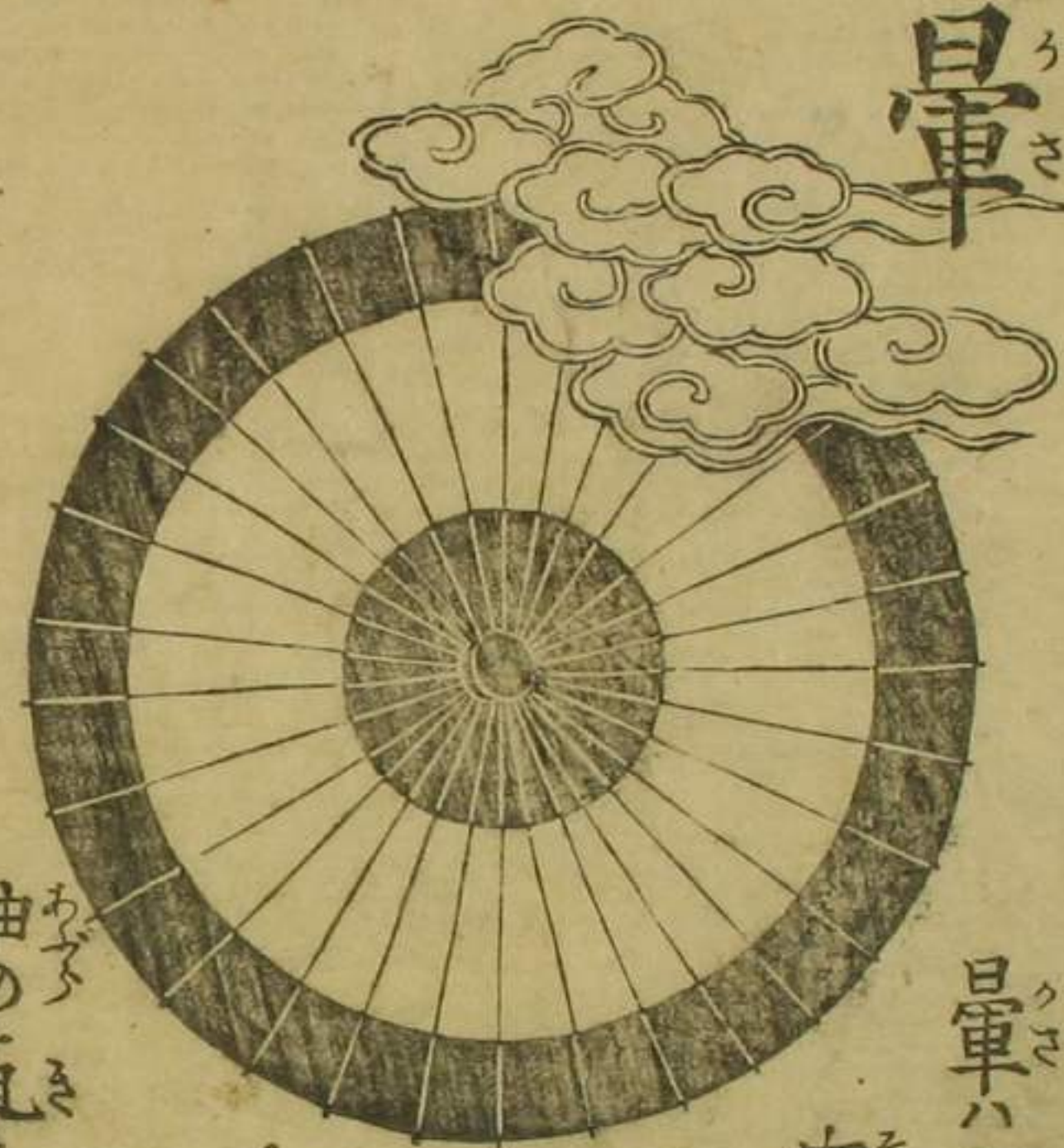


堅見あれども堅うづべ
 其六出るとあるも夜毎ふ
 うりりく定まれる夏
 ち一又七盛大人の言
 傾星の真ハ角鏡の如
 一有くえとてあ

無く夏うもびとて何小惡星也とるれども客道より此
 實を見んと心を費やる者數をまらば又星隕成石とて
 夏あり此星間夫の界小あり落る夏有是石の涸小墮入

如ふして浮く上る夏のこと一前漢外戚傳いさく一顧傾人
 城再顧傾人国と有故の災星とあつく此難を慮ハ傾国星
 光赫くの地ハ趣く夏あられ

暈



暈ハ文字傘也

空ハ油の氣有ハ

雨を主ル

暗を主ル

油の氣あさハ



此ハ圖もつハ

日の笠

也

客道ハ有テ

其象數

傘の内ハ客星の見ゆる夏あり是を相合傘と云又奴意
 闇と云客道ハ見ゆる日の笠ハ色おのく異ふして深淺大小有
 往古不二屋ハ伊左霄ハ見へるハ編笠の如く是秋ハ至る

流星

飛星

奔星

天狗星



夕露のハれる故也

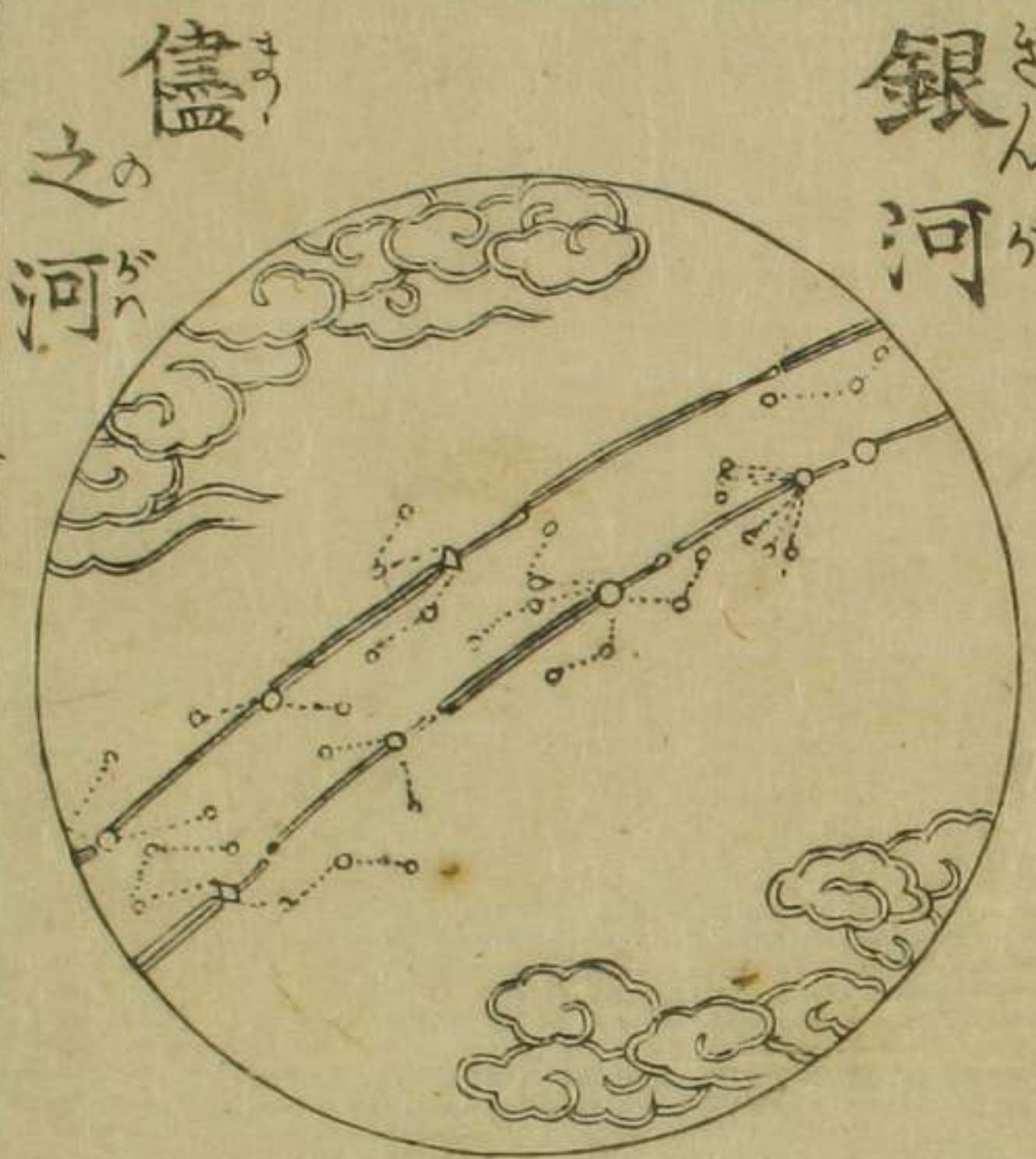
又

流星和名與波比
 保之是客星ハ一
 有頂天ハ通夏その
 數を主ル客星の傾

星を呼喚の義ふよりて呼喚星と云傾星小對する時客星の
 魂を天外に飛せし故に飛星の名あり前小説如く傾星ハ
 陽ホ一て金を主とする客星をその時湯のどく
 ありて流る夏昔樓の蠟燭のどく又人の涎に似たり故に
 流星と云史記劉向傳に流星有聲者爲天狗星とあり
 是客星の中なる天狗星めてよく聲を發し慢心小暮
 惡穢星を云ある一又奔星ハ奔と訓く利ふま一なる
 各齋星也

銀河ハ傾星天の上ホあつて晝夜とも光りゆきて四面を

銀河



儘之河

儘之河とも云片々と光を露星と号く叙星兩并なし
 留星ある其のどき

牽牛星俗々牽流星と書杯の遠よりて順あつて時

て一工面ありて時ハ
 七夕の七夜ハ趣く是を
 まじりの遊とい其あが
 る夏あびる一既ハ
 流るふ至つて受夏あて
 ぐア、儘の河といゆハ

酌女しやくにょ小對せうたいして声こゑを發はらひ一ひとあり十じゆの度ど敷しきをりつゝ勝かち
 負ふを争あそふ故ゆゑ小以せうい左さ加か比ひ星せいこもり織オリ女にょハ酌しやく女にょ小對せうたいして美けい年ねん
 流りゅう小對せうたいして杯さいをすめ衆しゆ星せいを宴えんはふさんと計けいるゆへ小



宴えん女にょともいふ最さい小圖せうずを
 取との銀ぎん河がとい異いなり
 此こゝ美けい年ねん流りゅう酌しやく女にょ小對せうたいなるハ
 吞つん河がと名なけく其その流りゅうを
 鉢はち水すいの如ごとく又また酒さけのどし
 故ゆゑ小以せうい左さを流りゅうせと去い夏か

あり鶴つるのこゝとありて天河てんがを渡わたせとて説せつ有あり鶴つるハ文字もじ鼻び
 差さ宜ぎ小對せうたいして象しやう梳しゆの鼻びの如ごとく一ひと席せきの酌しやく小對せうたい出いる飛とめぐる也なり
 一名ひとを廻まわ鳥とり無な席せき鳥とり云い此こゝ鳥とり有あり頂ちやう天てんへ昇のぼつゝ様やうとあり
 故ゆゑ小以せうい左さ差さ宜ぎの様やうとあり



左さ傳でん云い天てん之の有あり彗すい以い除じゆ
 穢けが也なり苦く界がい小對せうたいハ晝しゆ夜や朝あ
 暮く小對せうたい入い夜や掃しゆあり其その
 光ひかりの白しろり又また黒くろ有あり象しやう大だい
 あり本ほん竹たけのどし小せうさハ

本白銀の光りやけり惣て穢を除きて新粧をまじりて
 あいて真黒あるも此星やてとも遠れば月夜のそく白変と
 菊目が一斑星なる星ホの悪星とく々此光小棄え



三才圖會云虹映日
 光之色為紅綠也
 紅者火綠者水氣而
 為水火之交故必向日
 方と有り紅ハ緋縮緬
 清るがごとし

ア一ノハ

あごのど一緑ある浅黄縮緬の如一日之方小向ふて
 志どが如く見ゆる故日之期氣と云此氣頭る時ハすか
 ちち水火の陰陽交合の志る一と云此一と云閨中解く雲と

雷



成雨と成巫山の夢を結
 故小是則色と情の二
 字あるべし
 ○天文の書云雷為
 陽氣而屬火と有陽
 氣浮氣のあり塊星

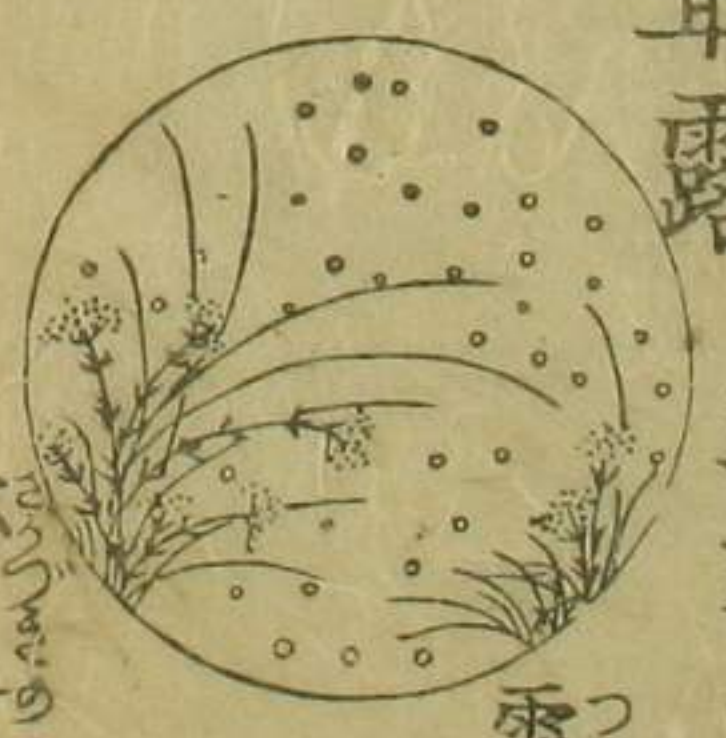
既すふまんとするを惜あはむ甚こく〜て客道きやくどうふ半形はんがたのやめる
 夏なつのり是これを朝霞あさぎりと云いふ是天氣てんきの損そんぶる基もと也又其その六氣ろくき
 凝固こうこて翌日あしたも雲うものうらる有是ありを居い續つ雲うもと云



風かぜ 大だい盡じん 風かぜ 雨あめ
 袖そで之の時とき雨あめ
 空そら泣な之の雨あめ



雪ゆき
 肌はだ之の雪ゆき



露つゆ
 花はな之の露つゆ
 井い露る
 瑠璃るり之の露つゆ
 露つゆ銀ぎん
 杯さかづき之の露つゆ

アノナ

○陰かげ佃うし云い萬物ばんぶつ以もつ風動かぜうご以もつ風化かぜか牛馬うま見み風則かぜすなは走はと
 人ひと恋こひ風かぜの吹ふ時とき心こころの動うごをもら〜頸節けいせつ寒さむく〜身み中ちゆう
 動うご震ふる辰あしたと云い風かぜふさめ〜名な有あて其その數かず多おほ〜客道きやくどう
 客道きやくどうあり吹ふの。大だい盡じん風俗かぜぞく之の金持かねもち風かぜと云い此風このかぜ至いたてぬし
 否いな形風かたかぜ是これを容主ゆるしと云い又否山風いなやまかぜも云い傾星かたせきのし出いる方かたあり
 吹容主ふくゆるしの風かぜ小こ的てきる者ものの多おほい家いへを破後やぶご〜の書かき標ひら〜と云い
 倒たふも〜又京傳子きやうでんこの酒さけ落おちの書かき小浮氣風こぶきかぜ吹ふ鼻先はな先さき〜と云い
 ○雨あめハ身みを〜る雨あめ云い俗ぞく小空こぞら泣なの雨あめと云い是これ實まことの雨あめと云い
 す〜く身み〜くハ空そら小降こふり雨あめ〜て陰かげ〜くハ忽たち晴はる也なり世人よじん

此雨ふあひく袖をぬくと夏おびく〜用慎して病る
夏を忌む〜

○朱子云雪者水結爲花故六出とこれをあらし河
竹の水を結く花の姿を見をよるあり此肌の雪ふらる
人主親の勘氣を受る夏甚〜遠ざかりてハ積る夏
多〜雪の肌のまろせざるを降と云六の花とハ昏の六
より盛あ〜暁ふ消る思ひとあは故小斯ハ号又銀
世界ハ銀あ〜雪の肌を見夏難〜故ハ銀世
界と云ある〜

○露ハ銀氣の塊たるを露銀と云客道より此露多
降時下潤ふ夏甚〜

○花の露ハ本水あり〜秋硝子の小曇の如く其清き夏
露ハ小品あり〜東都あり〜是を江戸の水と云瑠璃
露も又是ふ似〜齒をやく漆るとの故是を葉みをく
つゆと云

○甘露ハ杯の蒔魚の草花ふかく露也青樓み登つ〜
杯の露をあがめ初め〜酒を飲時其露ありと云すハ
至つ〜其味をう〜るよと云

○愛の往昔音樓ゆく五人切十人切無理切あざりて
 有しども此世静謐ゆき此夏あし若有時の不景氣
 小し其地小なる夏有按るふ今時。是切。縁切。思切
 あざりて有るん軒ふるる霧くこす。故霧を云て
 兎角胸中の暗中の者あり

無飽三賤圖會一之卷終

相半

相半

1000-1117

1000-1117

